

## 土田杏村

高倉君。君は此等の諸作を皆な一個のエチユウドだといつた。そして君がすべてを投げ出して丁ひ、今日はやつと一枚、今日はやつと二枚と、たゞ其の一つの作許りに何箇月かの全生命を注ぎ込んで居た眞剣さを、僕ほどよく知つて居たものは無いかと思ふ。最後の「切支丹ころび」などになると、筆惜みに筆惜みをして、全篇に向ひ甚だ大膽な省筆をした爲めに、其れを讀んで居ると、君が痛々しいまでに緊張した構想や描寫が眼について、僕は其れを一舉に讀み去るのに堪へなかつた。作品は床の間の置き物では無い。一つの作がよく纏つて居ようと居まいと、其んな器用さを愛して居れば、我々は飛んでも無い隔筆に落ちることとなる。要するところは其の全作を見て貰ひ、其の中に一

2  
ヒュマニテイがどつといふ風に強く表現せられて居るかを知つて貰ふことだ。さうした場合表現といふ言葉さへ、我々には何だか間接的に考へられて、いやな気がする。人生全體がエチユウドだ。たゞ此の直接の自分を、我々は自ら殘虐を感じるまで公平に、卒直に、訓練して見ようでは無いか。僕は君の創作の態度をよく知つて居るだけに、今、君の作品集の公にせられる場合、其れだけの事を世間に向つて語る可き義務を持つて居る様に思ふ。

恒 藤 恭

帝政露西亞が勞農露西亞になつたところで、大多數の露西亞人たちの性質に、さしたる變化が生じたわけでもあるまい。トルストイの物語に出て来るような『イワンの馬鹿』は、やつぱしそこいらにうろろしてゐるだらう。事によつた

4  
を第一歩にしてこれから出来るだけの爲事を續けて行き度いと思つて居ります知力で懶惰でそして又いかにも不眞實なこの作者の上に心の行く限り叱責の鞭を揮つて下さる方が一人でも多からんことを作者は今心の底から轉つて居るのであります。

未知の讀者諸君の前に少しく作者の御紹介を致します。

作者は土佐の田舎の海岸で呱呱の聲を擧げました。それは尊良親王御流講の舊蹟で有りました。幸徳秋水と同郷で有ります。作者の母と秋水とは幼な友達で有りました。秋水が少年の頃に蟹味噌が非常に好きで、いつも帆立貝の殻で焼いて食べたなどと言ふ話しを好く母から聞かされました。作者の家は六代続いた醫者の家で有りますが、そのもう好い加減つぶれかかつた舊家の一粒種として作者は生れました。中學を出て文學に志さうと致しました時に、家業を繼がないと言ふ理由で親戚全體の猛烈な反對に遭ひました。それで、とうとう家

ら以前よりも數がふえたかも知れまい。

高倉君が『イワンの馬鹿』みたやうな人だといふのではないが『イワンの馬鹿』と共通な性質を何處かに有つてゐる人だといふやうな氣もちがする。そうした人の至つて乏しそうな日本の文壇の中に、そうした人のゐることを知るのには、ほんとうにうれしい。

著者より讀者へ 高 倉 輝

3  
いよいよ最初の著作集を出すことになりました。この中に收めた三つの作品はいづれも恥しいものばかりでございます。どれもどれもが世に示すには餘りに貴しいもので有ることを作者は好く存じて居ります。が、とにも角にもこれが作者が漸く眞剣に創作の生活に入らうとした最初の足跡でございます。これ

を脱け出して、京都の三高の文科へ入學致しました。

丁度その時、三高では科外に尉川白村先生の「近代文學論」と言ふ講義が一年間續きました。これはあの「近代文學十講」の草稿になつたので有らうと存じますが、作者はこの講義から非常な利益を得ました。この爲に作者は初めて稍や具體的に藝術と言ふ觀念を捕捉する事が出来るやうになり、且つ讀む可き本の大きな指針を得たのであります。

やはり三高の三年生の時に、上田敏先生が歐羅巴から京都大學へ歸つて來られました。そして、これも大學の科外の金曜講演と言ふので「現代の藝術」と言ふ講義を續けられました。作者はまた熱心にこの講義を聴講いたしました。そしてまたそれから非常な影響を受けました。それが動機で京都大學の英文科に入學する事になりました。

大學時代の事を想ひ起こしますと、作者は今でも尙ほ慚愧と羞恥の念に堪へない感じが致します。そこには只だ懶惰と高慢と下劣と生意氣との醜いむくろのみが残されて居るのであります。幾度も落第しかけたり本當に落第したりして、それでも漸く六七年前に卒業いたしました。その時に作者を救つて呉れましたのが露西亞語の講師で有つた故山口茂一先生で有ります。作者は六年間山口先生に露西亞語を教つたので有りますが、露西亞語は作者が山口先生から得たものの中の極く一部分に過ぎなかつたと言ふ事が後になればなるほど尙ほはつきりと分かつて來るので有ります。山口先生に近づいて、作者は初めてこの限り無く醜い自分の姿に氣がつくやうになりました。そして、まだ作者の知らない價値ある世界がこの世にある事を教へられたのであります。

作者は生來非常な懶け者で有りまして、遂に人に示す可き何等の學問も知識も得なかつたので有りますが、只だちよつぱり露西亞の文學を覗いて見ました。露西亞の作家の中で作者が特に愛好致しますのはゴオリとゴンチャロフとテ

エホフとで有ります。ツルゲエネフヤトルストイヤドストイエフスキイはその時時の氣分によりまして非常に感嘆致しました。或はそれほど無かつたりどうも一定いたしません。露西亞以外の作者ではスタンダルとフロオベルとに特別に感嘆いたして居りますが、しかし此の二人はまだもつと好く讀んで見せんと分かりません。日本の作家の中で終始變らず作者が特別に愛讀いたしますのは森鷗外先生の總ての著作と「斷腸草雜藪」以後の永井荷風氏の諸作で有ります。特に荷風氏の「おかめ笹」には特別に深く傾倒いたして居るのであります。

この著作第一輯の出る大正十一年に作者は數へ齡三十二歳になりました。第二輯には長篇小説を、第三輯にはまた戯曲集を、第四輯には露西亞の主な作家の評傳を集めた文學史的なものを出し度いと計劃いたして居ります。

斯うして過去の爲事が幾分か纏つた形になりますにつけ、又更に適切にこれまでの苦しみ足りない自分の姿の恥しさを感じます。が、總てがこれから有

ります。これから出来るだけ苦しんで見ようと今は只だそればかり思つてゐます。

大正十一年一月一日